

上海・カンボジア(2)編



- 方安庵の卒業旅行に同行して(2019年4月) -
By Etemari





上海

初日

今回は父のクリニックの、いわば社員旅行に同行する形で上海とカンボジアを訪れた。初日は移動日だ。新千歳空港から4時間ほどのフライトで、上海空港に到着した。タクシーに乗り宿泊するホテルまで移動し、ホテルのレストランで中華料理を頂いた。海老チリや小籠包などもとても美味しかったが、特に北京ダックは絶品だった。本場の中華料理でお腹いっぱいになったところで、この日はフライトの疲れを癒すため解散となった。





DISNEYLAND

上海迪士尼乐园

2日目

2日目は、ホテルで朝食をとった後、上海ディズニーランドへと向かった。この日は生憎の曇り空で、前日までの予想気温よりもかなり低い気温だったが、到着してすぐパレードを見ることができたことで疲れなどからのネガティブな気分を打ち消すことができてよかった。事前にはリサーチしていた上海限定カチューシャを手に入れ、まずは一緒に回っていた職員さんの希望で「カリブの海賊」に乗ることにした。入り口には90分待ちと書かれていたが、回転が早く、並んでから30分ほどで順番が回ってきた。序盤の方は、東京ディズニーランドにある「カリブの海賊」と同じような作りだったので、中身も同じものなのかなあと少しがっかりな気分で臨んだけれど、進んでいくうちに、プロジェクションマッピングを使ったダイナミックな演出にまるで自分が海の中を本当に探検しているような気持ちになれた。素敵な「カリブの海賊」を降りて、近くのBBQレストランで昼食をとった後、ターザンのショーを見に行くことになった。これは、以前に私が中国雑技団を見てみたいと言ったのを同行の母が覚えていてくれ、上海ディズニーランドのターザンショーは、実は中国雑技団によるものだとの情報を知り、連れてきてくれたのである。

このショー、ディズニー映画の「ターザン」を30分ほどに短縮、さらにアクロバティックな動きをアレンジの上舞台ショーにしたものだ。30分ほどの短いものだったけれど、セリフがないので、逆にアクロバティックな高度な技に集中して楽しむことができた。ショーが終わり、夕方になって気温も下がってきたので、最後に、一目惚れした中国限定の「干支ダッフィ」のトラを購入しホテルへと帰った。







3日目

3日目はガイドさんに同行して頂き、上海市内をバスで観光する流れだ。まず、田子坊へと向かった。ここは古い住宅街に小さなお店が立ち並んでいる観光客に人気のスポット。昼間になると観光客でいっぱいになってしまうそう。この日は、早朝だったからか観光客もまだ少なく、迷路のように入り組んだ裏通りをゆっくりと探索することができた。私が一番行きたかった饅頭屋さんも、その裏通りにあった。ここは、定番の小籠包や焼売だけではなく、犬やピカチュウなどを模した変わった饅頭も売っていて、そのインパクトあるビジュアルからSNS上で人気となっていたのを見て、気になっていた店。



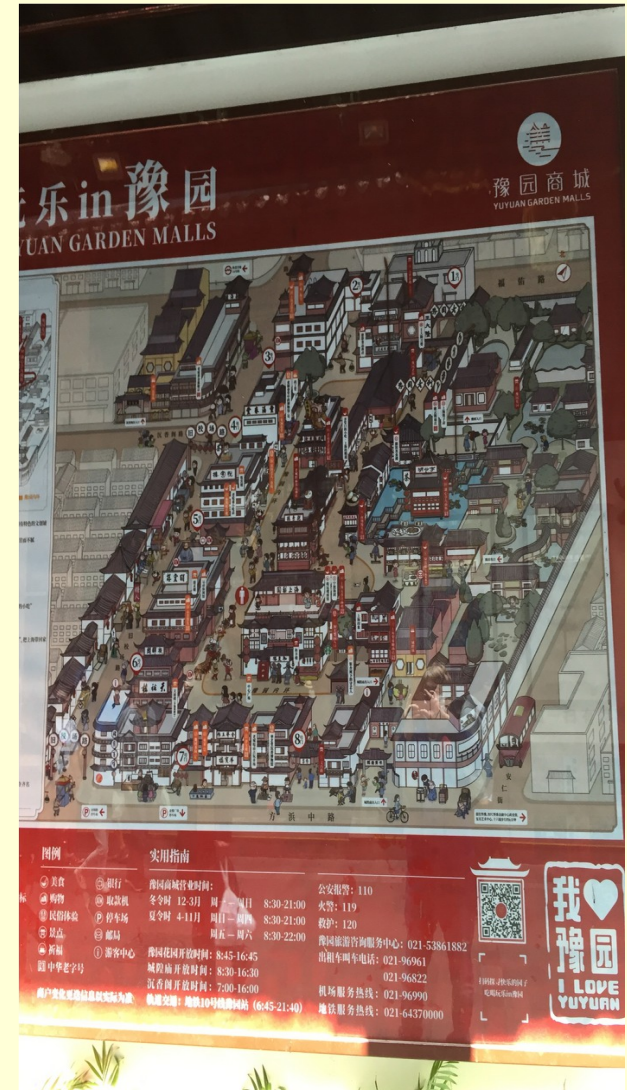
説明は全て中国語だった上に、店員の女性は英語も通じない方だったので、とにかく見た目が面白いものを選ぼうと、私は数ある饅頭の中からアヒルを選んだ。正直、味には期待していなかったのだが、考えていたより甘味があり、日本のあんことは少し違う風味がして美味しかった。

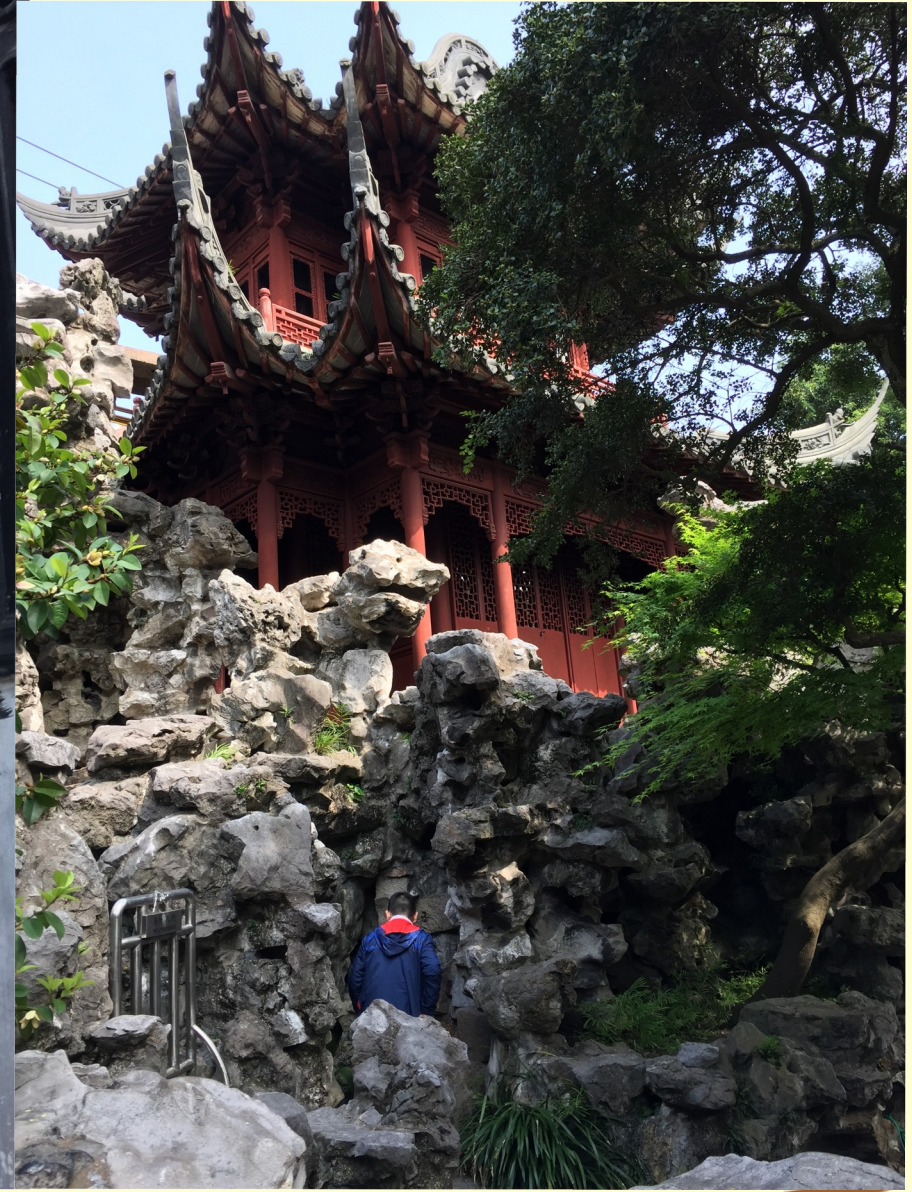




3日目 つづき

お昼近くなり観光客も増えてきたところで田子坊を出発、「新天地」、「外滩」を周り、「上海老街」で昼食を取るようになった。日本語も英語も満足に伝わらない中で自分たちだけで注文を取るの
はなかなか難しいものだ。なんとか注文して昼食を終え、その後は母と2人で、本場のタピオカを飲みながら老街をぶらぶらと散策したり、豫園という400年以上前に作られた庭園の中に入った。めぐり歩くと、中ほどに差し掛かる前、3本足の龍に飾られた「龍壁」がある。印象に残るのは、塀の上にあるこの瓦の装飾の龍についてのエピソード。中国では、龍の指は4本と決まっているのだが、豫園の建造された明の時代は、皇帝しか龍の装飾を使えなかったと言う。そのため、わざと3本で装飾を作り、「これは龍ではない!」と言い張ったのだとか。この龍以外にも、色々な形の窓やオブジェ、花瓶の形の門など、とても装飾に凝った庭園で、隅々まで楽しむことができた。豫園を出て、そのまま空港に向かい、この日1日お世話になったガイドさんに別れを告げて私たちは愈々カンボジアに向かった。





カンボジア編



4日目の朝は野良犬の鳴き声で目が覚めた。前日の夜にシェムリアップ空港に到着し、トゥクトゥクに乗って日本人の奥さんとカンボジア人の旦那さんが経営している民宿まで移動。着替えて民宿の外に出ると、みんなすでに掛ける準備を終えて待っていた。私たちは再びトゥクトゥクに乗り、まずは朝食を取るため近くのレストランに移動した。レストランと言っても室内ではなく、屋外にテーブルと椅子を置いているだけなので、野良犬やハエなどがたくさん寄ってくる。移動している途中も野良犬をたくさん見かけたが、カンボジアにはとにかく至る所に野良犬がいる。人馴れしている様子で近くまでやってくるが、狂犬病を持っている可能性があるので決して触れてはいけないと民宿の方に念を押された。





4日目



朝食を終えて再びトウトウクに乗り、アンコールトムへと向かう。アンコールトムとは「大きな街」という意味で、その名の通り、一辺3kmの城壁に囲まれた大型の城塞都市だ。現在のカンボジア王国の基盤となったクメール王国の首都の遺跡である。



4日目 つづき



アンコールトムは5つの門に囲まれていて、今回は南大門という有名な門から中に入った。門の前の橋の両側には、巨大なナーガ(蛇神)で綱引きをする神々とアスラ(悪魔)が欄干に並んでいる。クメール王朝は9世紀から15世紀にかけて栄えた王国なので、ほとんど柱だけになっている場所も多く、廃墟のような印象を受けるが、気味が悪いというよりも荘厳な雰囲気の方が勝る。なかでも有名なのは、アンコールトムの中心にあるバイヨン寺院だ。ここには、「クメールの微笑み」と呼ばれる、観世音菩薩の顔が四面についた巨大な塔がある。この塔は54個あり、表情もひとつひとつ微妙に違うので、見ていると全く飽きない。

次に、「天空の城ラピュタ」のモデルにもなったと言われている、ベンメリア遺跡へと向かった。密林の中を進んでいくと、突如現れた巨大遺跡は、異様な迫力があつた。ベンメリア遺跡の特徴は、アンコールトムと比べて崩壊が激しい点だ。





建物を形作っていた岩は崩れ落ちて瓦礫の山となり、壁や柱に苔がびっしりと生え、巨大な木が建物を侵食するように絡みついて根を張っている。密林の中で朽ちかけている巨大遺跡を見ていると、時間が何百年も前で止まっているような錯覚を覚えた。木や苔が石造りの建物を飲み込んでいる様子は、自然の生命力の強さを改めて感じた。（編集；木は一部修正しています。すみません）





4日目 つづき2

レストランで少し涼んだのち、念願のアンコールワットへと向かった。アンコールワットは、3つの回廊と5基の塔で構成されており、全てじっくり見て回るには1日以上かかるため、ガイドさんに主要な場所だけ案内してもらおうことにした。ここも他の遺跡と同じように、天井や壁にはレリーフがびっしりとある。特に面白かったのは、第一回廊にある、天国と地獄を描いたレリーフだ。壁画は3層に分かれていて、上層には「王や王の家族の天国への道」が、中層は「地上の王族や従者たち」、下層は「地獄」が描かれている。地獄の絵には、火あぶりになっている人や舌を抜かれる人、閻魔様に罪を軽くしてもらえるように懇願している人まで細かく描かれており、ひとつひとつに見入ってしまった。最後に、有名な「逆きアンコールワット」で写真撮影し、アンコール遺跡群とは別れを告げ、一旦宿へと戻った。40度近い気温の中歩き回って汗だくだったため、軽くシャワーを浴びると、とても気持ちよかった。



4日目



夜はサーカスを見る予定だったので、市内のレストランで食事を取ったあとそのままサーカスへと向かった。小さな小屋で、中心に円があり、それをぐるっと囲うように観客席が用意されている。始まる頃には満員で、ヨーロッパ系の観客が多いようだった。出演者はほとんどが男性で、アクロバティックな演技には目を奪われたが、ゆっくりとして妖艶な女性によるダンスも印象的だった。



サーカスというと小道具を使うイメージだったが、このサーカスはほぼ自分の身体を使った演目で、それが逆にハラハラさせられて目が釘付けになった。1時間ほどで公演が終了し、この日は昼間の暑さで消耗した体力のせいか、宿に戻るとすぐ眠気に襲われて寝てしまった。



5日目-最後の日に



さてみなさん、ここからしばらく、キリングフィールドの前までは、Etemariさんではなく、方安庵院長が書きます。若々しい感性とは程遠いので、しばらくご勘弁を。というのも、ここからは、わたしは、埼玉などで、介護施設など広く展開されている「元気村」の創設者の方が、カンボジアでも看護を中心の学校をアンコール・ワット大学と連携して設立したり、シエムリアップで病院を設立されていて、その見学に行ったのです。これからの6枚の写真はそれになります。5日目、と、言うわけで最後の日の午前は買い物組と病院見学の私が別行動となったのでした。

あと、カンボジアは、全部で7名で行ったのですが、わたしをいれて朝から晩までの日勤組の3名は、カンボジアで一番あつい4月を経験しに訪れて、やっぱり見事に倒れたのです。元気なEtemariさんを含む残りの4名のみが、アンコールトムに続いてアンコールワットを訪れました。わたしを除く6名で、夜のサーカスも見に行きました。若いこと(と言っても20代は2名だけですけど)はよいことです。

←アンコール・ワット大学の中で。看護学の実習です。創傷の処置の勉強をしています。



↑ アンコール・ワット大学の前影です。左袖のずと手前、前庭の横で門の近くに元気村で建設する看護学科が立つ予定とか。

右は、玄関に入ったところに、会長さんの「共生」の理念の掲示板がありました。



↑ 「共生」の理学療法士要請学校
右が「共生」病院。外科、内科
が中心となります。スタッフは、中国
現地の医師、日本人の眼科医師も
おられました。日本人医師募集中でした。
男性が神成会長さん、その横の女性は、
カンボジア人の彼の養女さん、賢い若者
で彼の秘書役をしています。
薬も各国から。一般的なものが多い。 →





さて、旅の最後に、全員でキリングフィールドを訪れた。キリングフィールドとは、ポル・ポト政権下で大量虐殺が行われた処刑場のことだ。この大量虐殺では、当時のカンボジアの人口の約三分の一である300万人が殺され、この場所、キリングフィールドだけでも2万人が殺されたと言う。

人の立つところに映画でも有名な頭骨の塔が立っている。↓



↑ 慰霊のための寺院の一部か。

ポルポトは、自らの政治体制の矛盾を見抜きうる「インテリ階級」を極度に恐れ、医師や教師を次々と殺して言った。メガネをかけていたという理由だけで処刑された人もいたそうだ。慰霊塔には数え切れないほどの犠牲者の頭蓋骨が収納されていた。頭蓋骨は四面に整然と並べられており、その人為的で几帳面な並べ方に、全て作り物なのではないかと疑うほどだった。それでも、ひとつひとつの骨は、少しずつ大きさやバランスなどが違っていて、やはりそれは現実に生きていた人間なのだと実感させられた。そう、この頭蓋骨の持ち主ひとりひとりに家族がいて、人生があったのだ。(次ページにつづく)

5日目（最終日）のさいごに



（前ページからつづき）

わたしは、つい数ヶ月前、ポーランドのアウシュヴィッツ強制収容所を訪れた時も同じく心が締め付けられるような感覚に陥ったが、写真や処刑場だけでなく、本物の犠牲者の遺骨を見ると、少し違った感情を覚える。今からそう遠くない過去に、日本からそう遠くないアジアの国でこんなにも残虐なことが行われていたという事実。知識として知ってはいても実際に目の前にすると、今回は慰霊塔しか見ることはできなかったのだけれど、カンボジアという国の成り立ちを知る上で、素晴らしい遺跡に劣らず、いやそれ以上に欠かす事の出来ない場所であると強く感じた。

昨今、このような負の歴史に触れる若者は少なくなりつつあるのかもしれない。現に、カンボジアでは、キリングフィールドでの大虐殺は他国との戦争ではなく内戦によって起こった恥ずべきものとして、学校でも教えられないと言う。それは、たしかに目を背けたくなる光景でもあるけれど、負の歴史は思っているよりもずっと身近で、決して過去にだけ存在するものだとは限らないわけで、わたしは、これからも、観光や楽しいことばかりでなく、人としての学びのある旅をしていきたい。日本へ帰る飛行機の中、私はそんなことを考えていた。

みなさん、お疲れ様でした。（Etemari）





編集後記：降って湧いたコロナの災難。振り返って見れば、この当院の「修学旅行」本当に、2019.4月で良かったとしみじみ思います。

わたしは、自主定年後、このカンボジアのあたりで、こどもと接して人生最後を、と思ったのですが、はかなく夢は崩れさりました。でも諦めていませんし、あきらめるなんて、患者さんに無理いって閉院したのには出来ませんよ。

自分の家族を、そして、仲間たちを想いつつこのEtemariさんの紀行文をまとめました。一緒にすごした、かんじゃさんたち、みんな、ありがとう！ コロナは、けんさ、そしてよぼうでなんとか。あるノーベル賞学者の意見に、わたしは大だい賛成です。みんながんばろう！

